霧のルーシェ

水樹ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧のルーシエ

【Nコード】

N3888Z

【作者名】

水樹ヒロ

【あらすじ】

世界の中心に唯一ある…広大な大陸【パンギア】

その東端に、とある渓谷があった。

不気味な鳴き声が響くその渓谷を人々は…【クルスク・バレー】と呼び、恐れていた。

年に数日しか霧が晴れないこの渓谷には…500年前に滅んだ魔族

が隠れ住んでいると噂されており。

今まで多くの軍隊が魔族の討伐に向かうも、生還した者は誰一人いなかった。

そんな…恐怖の溪谷クルスク・バレーには、もう一つの伝説があった。

魔女の伝説である。

『この溪谷には一人の美しい魔女が住んでおり、彼女へ己の大切な物を渡せば…どんな願いも叶えてくれる。』

そんな伝説が、人々の間に流れていた。

(前書き)

クルスク・バレーの中心部：濃霧で数歩先までしか見えないような中に、塀に囲まれた三階建ての洋館が立っていた。

その洋館の庭先に、花壇へ水をやる一人の大男がいた。

身長は2mを超え、全身が石で造られた人型の魔物：【ストーンゴレム】種のディアスである。

「うむ。今日も綺麗な花を咲かせてくれた。」

ディアスは花壇の花に微笑むと：双子の女の子が走って来た。

ニンフ族のヤンとリンである。

背丈は人間の幼児くらいで、ヤンはポニーテール：リンはツインテールをしている。

「ディアス様！そろそろお茶の時間で〜す！」

「ですです〜！」

「おお、もうそんな時間か？ありがとう、二人とも。」

「いえいえ！きつとまだかまだかと、お待ちになられてますよ〜！」

「私達のご主人様が！」

洋館の裏側には小さな湖があり、その畔にあるベンチで一人の少女が書物を読んでいた。

尖った耳を持ち、背中には黒い羽根が目につくが…容姿は人間の少女と変わりなかった。

ディアスは紅茶を入れた四つのカップをトレーに置くと、ヤンヤリと一緒に彼女がいる湖の畔へと向かった。

「申し訳ございません…少々遅くなってしまいました。」

「申し訳ありません。」

「…ルーシエ様あ。」

ディアス達がそう告げると…黒装束を着たその少女は、読んでいる書物を閉じてゆっくり振り返った。

「構いません。さ、皆もお茶にいたしましょう?。」

「はっ。」

この少女こそ…霧の渓谷クルスク・バレーに住む魔女【ルーシエ】であった。

この物語は彼女…ルーシエが紡ぐ、運命の物語。

陽も沈み、旅の商人は野宿する事にした。

ミンクが飛んで逃げないように翼を押さえるような形で縄を縛ると、旅の商人は肉を焼いて食べ始めた。

「逃げたりすんじゃないぞ？もし…逃げたりしたら、この焚き火の中へ放り込んでやる！」

肉を焼いている焚き火が、勢いよく燃え上がる。

「…。」

ミンクは悲しそうな表情で俯いていた。

ルーシエは昔から事ある毎に、自分を注意しに来てくれた。

厳しく叱りながらも…時には、優しく諭してくれたりもしてくれた。

「ルーシエ…。」

「ん？何か喋ったか？」

ミンクは涙を堪えて、そっぽを向くと…旅の商人はニヤリッと笑いながら彼女に歩み寄った。

「小さいっていつでも女だ！最近、ご無沙汰だったしな…。」

「な、何する気？」

強情を張るミンクの衣服を掴む商人。

「！…なっ！？や、やめてよぉ！」

「うるさい…！」

バチン！

商人がミンクを叩くと、小さく華奢なミンクの体が宙を舞った。

「痛い…痛いよぉ…。」

「言う事聞いてりゃ痛い目をみないさ。ふっふっふ！」

商人がミンクに歩み寄ると、彼女の衣服に手を描けた。

「い、いやああ！助けてえ！…ルーシエツ！！」

ミンクの悲鳴がリゲルの森にこだますると…白い魔法陣が展開した。

「…コールドウィンド。」

「な、なんだ！？…うわぁ！」

突然、女性の声が出たかと思うと…冷気の風が吹き荒れて、商人の両足が凍結した。

「ひ、ひいっ!?!」

商人が恐怖のあまり声を発すると…冷気が漂うなかを、一人の少女が歩いてきた。

「…まったく。だから言ったではありませんか？悪戯は止しなさいと。」

「あつ。」

冷気の中…ルーシエが姿を現すと、ミンクは嬉しそうに笑顔で彼女を見つめた。

「ルーシエッ!?!」

ルーシエは無言で旅の商人に歩み寄ると、彼の下顎を掴んだ。

「ここで見た事は全て内密にお願い致します…。」

「い、嫌だと言ったら!?!」

「決まっているでしょう?…生かしては帰しません。」

彼の下顎を掴むルーシエの腕から、冷気が溢れ出る。

「ひいっ!わ、わかった!誰にも言わん!だから、助けてくれっ!」

必死に走って逃げる商人を、微笑みながら見つめるルーシエ。

「お前みたいな奴がルーシエに敵うもんかぁ！バーカ！」

ミンクが走り去る商人に向かってそう叫ぶと…ルーシエはミンクの翼を掴まんで、目の高さまで上げた。

「そういえば…私も貴女に馬鹿と言われた気がしたのですが？」

「あつ！あ、あれは…え〜つと。」

ルーシエが笑顔でそう言うと、大量に汗をかきながら視線を反らすミンク。

「これは…たつぷりお仕置きしないといけないようですね？」

「えっ？…あの…ちよつ…ルーシエ？…ひっ！」

ルーシエはミンクの尾を掴むと、勢いよく回し始めた。

「いだだだぁ！切れちゃう！尻尾切れちゃうよぉ！」

「黙りなさい！気安く他人を馬鹿にしたり、悪戯をしたりした罰です！」

「う、ごめんなさぁいっ…！」

尾の付け根を押さえながら目を回すミンクを見つめ…ルーシエは苦

笑いを浮かべた。

「まったく…貴女は一人にさせておくと、ろくな事しませんね…それは、赤子の頃からでしたが。」

「えっ?」

「いえっ。」

ルーシエはミンクを肩に座らせると…彼女の額を指で弾いた。

「あう。」

「今後は…私の目が届くところにいなさい。」

「ルーシエ…。」

「これからは我が家で一緒に住みましょう。寂しさを紛らす為、他人に悪戯しないよう…監視しないといけませんしね。」

ルーシエがウインクすると…ミンクは涙目になった。

「ふふふ…泣いてるのですか?ミンク。」

「な、泣いてなんかないもん!…ふんだっ!隙があったら、すぐさま逃げ出してやるんだからっ!」

「はいはい…わかりました。」

こうしてルーシエは…小悪魔のミンクと一緒に、クルスク・バレ―

で住む事となった。

ルーシエはミンクの出生の秘密を知っているのだが、それは後に明かされる事となる。

「うんしょ！うんしょ！」

沢山の食料品が入った紙袋を大事に抱えて、ヤンとリンが街道を歩いていた。

霧の渓谷クルスク・バレーでは、その特別な環境上：なかなか食物が育たない。

その為：食料を求めて、定期的に近くの人間族の村へ買い出しに行く必要があった。

ヤンとリンはニンフ特有の尖った耳をフードで隠すと、村で買い物済ませて帰路についたところだった。

「ミンクちゃんも加わって買い物の量が増えたねえ？」

「ねっ！けど、賑やかで楽しいよ〜？」

「そうだねえ！」

ヤンとリンが街道を歩いていくと、一人の村人が後ろから追っつけていた。

その村人はまだ若い少年だったが、ヤンとリンの正体を探っている

ようだった。

「あの姉妹…前々から怪しいと思ってたんだ。季節とか関係無しにフード被ってるし、あの赤い眼…。あれは、人間の眼じゃない。」

ヤンとリンはクルスク・バレーへと続く林に入っていく。

「この先は立ち入りを禁じられた…魔女が住むとされる溪谷じゃないか。」

少年の背後にディアスが、ゆっくりと姿を現した。

「そっか！あの姉妹はっ！大変だ…早く村の皆に伝えなきゃ！」

少年が慌てて走り去ろうとすると、背後のディアスに激突して尻餅をついた。

「痛っ！…つう〜！…ん？」

少年が顔を上げると…ディアスが彼を睨みながら見下ろしていた。

「う、うわぁーっ！化け物だぁ！？」

「静かに…。」

「うわぁー！」

ディアスは少年を掴み上げると、肩に担いでクルスク・バレーへと入っていった。

「は、離せ！やめろよーっ！」

「そんなに耳元で騒がれては、うるさくてかないませんな。」

ディアスは少年のうなじ辺りに一撃浴びせて気絶させると…目の前に現れた黄色い、光りの魔法陣へ入って姿を消した。

洋館に着いたディアスは応接間にいるルーシエの下へ向かった。

「ルーシエ様。」

ディアスが応接間へ入ると…魔女ルーシエがミンクを肩に座らせて、読書をしていた。

「ん？ルーシエ、石のおじさんが来たよっ！」

「ディアス…私に何用ですか？」

「はい。溪谷入り口の林にて野草を採っていると…ヤンとリンを尾行する、不審な人間がいたので連行した次第でございます。」

ディアスは気絶した少年をソファアに下ろし、ルーシエへそう説明した。

ルーシエは少年に歩み寄ると、人差し指に魔力を宿して彼の額に触れた。

「ん？…うわぁ！？」

ルーシエの姿を見て、慌てて後退りする少年。

「ま…ままま、魔女だっ！魔女の噂はやっぱり本当だったんだ！」

少年が動揺していると、ルーシエは席に戻って紅茶を飲み始めた。

「貴方…お名前は？」

「えっ！？…ジ、ジャン。」

「では、ジャン。幼子二人を尾行していたらしいですね？…何故、そのような真似を？」

「幼子？」

「小さい…という意味だ。貴殿は、二人の少女を追いかけていたではないか。」

ディアスがそう話すと、ジャンはテーブルに手を勢いよく叩いて大声で話した。

「だって！い、一年中フードを被って買い物に来てるし…目も赤い！あの眼は絶対に人間の眼じゃない！」

「ジャン…貴方が追いかけていた子供というのは、この二人ではありませんか？」

ルーシエがそう話すと、彼女が座る椅子の後ろからヤンとリンが姿

を見せた。

「あーっ!?!? やっぱり… やっぱり! 魔女の使いだったんだ!」

ジャンに向かい、舌を出すリン。

「さて… 困りましたね? ディアス、彼をどうしましょうか?」

「ヤンとリンの正体を知ってしまった以上… 生かして村には帰せませぬな。」

「えっ!?!?… あがつ!」

ジャンの頭を鷲掴みすると、ディアスは目線の高さまで持ち上げた。

「ルーシエ様。この者を処分致します。」

「構いません… やって下さい。」

そう告げたルーシエの肩では、ミンクがニヤニヤしている。

「や、やだ… 助けて下さい!」

「しかし、貴女はこの子達の正体を知ってしまった。私は悪しき魔女… もはや、貴方を殺すしか手はありません。」

「だ、誰にも喋らないっ! 村の皆にも秘密にするから助けて下さい!」

ルーシエはミンクをチラ見すると、ミンクが苦笑いを浮かべた。

「ふふ…ディアス、離してあげなさい。」

「はっ。」

「うわっ!」

ルーシエの命でディアスが手を離すと、ジャンは勢いよく床に尻を強打した。

「痛たたっ!」

ジャンに歩み寄ったルーシエは、あるネックレスを手渡した。

「な、何?これ。」

「これは【真信のネックレス】…。我々の友好の証です。」

ルーシエはジャンに真信のネックレスを付けると、キョトンとする彼を見ながら話しを続けた。

「そのネックレスには、私の魔力が込もっています。ですので…決して、私達を裏切ったりしないように。」

「っ、つまり…村の皆に話すなって事?」

「その通りです。理解力のある子で助かります。」

ルーシエがそう話した後に微笑むと…ジャンは、生唾を飲んだ。

「もしも…もしも、僕が村の皆に話したりしたら？」

ジャンが恐る恐る問いかけると、ルーシエは険しい表情で話した。

「万が一…私達の信頼を裏切った場合、貴方には罰を受けていただきます…。」

「罰？」

「そう。その罰によって、貴方は未来永劫苦しむ事になるでしょう。」

ルーシエはジャンに歩み寄ると、再び人差し指に魔力を宿した。

「辛い思いをしたくなければ、私達を裏切ったりしないで下さい…。」

「あ…。」

ルーシエがそう告げながら、人差し指でジャンの額に触れると…彼は再び意識を失った。

「ディアス。この子を溪谷入り口の林へ連れて行きなさい。」

「はっ。」

ディアスはジャンを担ぎ上げると、応接間から出ていった。

すると…二人を見送ったルーシエの横へ、ミンクが飛んで来た。

「ルーシエ、あいつホントに黙ってると思う？」

「十中八九…話すでしょうね？」

「だよねえ？あの子供の性格上…きっと喋る気がするんだ。ヤンとリンの正体がバレちゃったら、食料の調達が出来なくなっちゃおうし…やっぱり殺した方が良かったんじゃない？」

ミンクがそう言うと、ルーシエはまた険しい表情となった。

「万が一、彼が村人達に話しをした場合…死より辛い罰を受けてもらいます。」

「死より…辛い罰？」

ミンクが聞き返すと、ルーシエは静かに頷いた。

「そう。約束は破ってはならないという事を、彼に知ってもらおう為に…あのネックレスを差し上げたのですから。」

その頃…。

ジャンは、クルスク・バレー入り口の林の中で目を覚ました。

「ここは溪谷の…。確か僕は、化け物にさらわれて…魔女に会って。」

「

四つん這いになって頭を振るジャン。

「夢…だったのかなあ？」

すると…首から垂れたネックレスを見て、ジャンは背筋が凍った。

「夢じゃない…ホントに魔女はいたんだっ！」

ジャンは慌てて村へ帰ると…早速ルーシェとの約束を破って、村中にクルスク・バレーとルーシェ達の事を話して回った。

すると…力説するジャンの胸元にあるネックレスの宝石が、不気味なくらいに赤く光っていた。

「…ん？」

クルスク・バレーの洋館で、湖を眺めながら読書をしていたルーシェは…ネックレスの魔力が発動したのを感じた。

「やれやれ…もうですか？」

その夜…。

ジャンは自宅に帰ると、ベッドへ横になった。

「なんだよ！皆、僕の話しを聞いてくれやしないっ！魔女は本当にいたんだ！」

「ジャンや、夕飯の準備が出来たよ？」

「はい、今行くよっ！」

ジャンが部屋から走って出ていくと…彼の横たわっていたベッドに、人の形をしたシミがついていた。

「母さん、今日の夕飯は何？」

「ジャン？…！？…きゃあぁーっ！…！」

村中に響き渡るジャンの母親の悲鳴。

「どうしたっ！」

村人が慌ててジャンの家に駆けつけると…彼の母親の目の前に、スライムのようなジェル状の体となったジャンが立っていた。

「ば、化け物っ！」

「化け物？僕だよ、母さん！ジャンだよっ！」

ジャンの母親の前に、屈強な男達が立ちはだかった。

「化け物めっ！ジャンを食い殺して、姿を真似たのか！」

「許さんぞっ！」

「な、なんだよ…。」

村人が睨むなか…ジャンは窓に映った自分の姿を見て、愕然とした。

「こ…これが僕？う、嘘だ…。」

ジャンが絶望感に苛まれていると…村人の群がる家の入り口辺りに、ルーシエの姿を見つけた。

「あつ！魔女…。」

ジャンがルーシエの所に行こうとした瞬間…村人の一人が剣で彼を突き刺した。

「うわああ…！」

「死ね、化け物っ…！」

次々と村人がジャンに剣を突き刺すなか…ルーシエはゆっくり歩み寄った。

ジャンは身体中に剣が突き刺さった状態のまま…救いを求めるような眼差しでルーシエを見つめた。

「お、お願い…助け…て。」

「…私は言った筈ですよ？約束を破ったら罰を受けてもらつと。」

「痛い…痛いよ。」

「貴方は直に、人間としての意識を持ったまま…本物のモンスター【スライム】となり、本能の赴くまま村人を食い荒らすでしょう…」

「そ、そんな…」

「自分の意思に関係無く、村の民を皆殺しにするのです…」

「や、やダ…モンスターになん力…なりたくない…」

「それつが回らなくなってきましたか…。村人を救いたければ、早くこの村から去りなさい。良いですね？」

「そん…ナ…助…ケテ。」

ルーシエは冷たい笑顔のまま呟くと…俯くジャンを尻目に、村を去っていった。

その日から…ジャンの姿を見た者は、誰一人いない。

家の裏に造られた彼の墓に花を添えられると…ルーシエは肩にミンクを座らせ、森の中へ去っていった。

世の中には欲に目が眩み、悪事を繰り返す者がいる。

食欲や性欲など…様々な欲が、人間を悪に染めようと誘惑する。

クルスク・バレーを望む高台に、一人の男が立っていた。

「ここに魔女がいんだなあ？」

男の名はレバントス。

パンギア最大の王都【ライクナッド】で盗賊をやっていた彼はある噂を耳にした。

【クルスク・バレーに住む魔女は…己が大切にしている物を譲れば、どんな願いでも叶えてくれる。】

それを聞いた彼は、霧の渓谷クルスク・バレーへ向かった。

誰も見た事がない真の宝を手に入れる為…。

そして、魔女を誘拐し…願いを叶える力を独占する為に。

「へへ…魔女か。いい女だといいな。」

レバントスは霧の渓谷へ下りていくと…すぐに濃霧が彼の視界を奪った。

「ま、真っ白じゃねえか！」

レバントスが辺りを警戒しながら歩いていくと、突然…彼の足を誰かが掴んだ。

「わっ!?!…な、なんだっ!?!」

レバントスが動揺していると…その腕は凄まじい力で彼の身体を引っ張った。

「うわっ!?!うわああっ!」

周囲が真っ白な空間をまっ逆さまに落ちていくレバントス。

すると、霧のかかった池に頭から飛び込んだ。

「ぶはあ!な、なんだっ!なんだっ!」

レバントスが周りを見てみると…野生のニンフが、集団で水浴びをしていた。

「!?!」

「!?!」

人間…しかも男のレバントスを見て、逃げ惑うニンフ達。

野生のニンフは、ヤンヤリンと違い…裸で言葉が使えない。

故に…かつては野生のニンフが数多く誘拐され、人間達に好き勝手されていた。

「うひゃー!女だらけじゃねえか!天国か?ここはっ!」

泣いて逃げ惑うニンフを捕まえては、レバントスは欲望の限りを尽

くした。

逆らう者は手持ちのナイフで刺し殺し、恐怖で怯えるニンフ達に欲望をぶつけるレバントス。

「はははっ！最高だぜ！ここはよーっ！」

レバントスは無数に倒れたニンフ達の上に座って、大笑いしていた。

「…むにゃむにゃ。いいねえ…もつと、もつとだ…むにゃむにゃ。」

「ひひひっ！人間ってホントにバカ！」

霧の溪谷に入っすぐの所で眠っているレバントスの上に、ミンクが座っていた。

「あたしが唱えた幻影魔法【チャーム】で、楽しんでるみたいだねえ…お・じ・さんっ？」

ミンクは笑いながらレバントスの上で踊りだすと、濃霧の中からルーシエが姿を現した。

「ミンク、お見事です…。」

「ルーシエも…おじさんの足を引っ張って気絶させる役、お疲れさま！」

「ふふふ…ディアス、ありますか？」

ルーシエはレバントスに歩み寄ると、ディアスが濃霧の中から姿を現した。

「…ここに。」

「彼を我が家へ。」

「承知致しました。」

ディアスはレバントスを担ぎ上げると、ルーシエの洋館へ向かった。

「ルーシエ、あのおじさん…どうするの？」

「ここへ何をしに来たのか確かめないといけません。」

「悪い事だったらどうすんのさあ。」

「その時は、命を奪うまでです…。」

ルーシエは微笑むと…ミンクを肩に座らせ、濃霧の中へ消えていった。

「ん…。」

レバントスが目を覚ますと、そこは豪華な部屋の中だった。

「じ、じいね…。」

レバントスは部屋を出ると…気配を殺しながら、廊下を走っていった。

「ルーシエ様あ。今日のオヤツは、果物のケーキでえす！」

「でえす！」

「！」

レバントスが身を隠すと…応接間へ入っていくヤンとリンの姿を見つけた。

「おっ！…へへ！あれもあの女どもと同じ匂いがするぜ！」

夢だったのも露知らず…レバントスは高まる欲望を抑えながら応接間を覗くと、ヤンとリンに微笑むルーシエの姿を見つけた。

「堂々としたあの容姿…あれが魔女か？」

ヤンとリンから注いでもらった紅茶を飲み、微笑む二人に語りかけるルーシエ。

「想像より若いな…。」

ルーシエの体を舐め回すかのように見ると…レバントス是不気味に微笑んだ。

「こりゃあ良い…三人まとめて誘拐するとうまい！」

「…愚かな。」

「！」

レバントスが振り返ると同時に、彼の頭をディアスが鷲掴みした。

「我が主ルーシエ様を卑猥な眼差しで見つめた罪は重い。」

「うがああっ！」

ディアスが握力を増すと、レバントスの絶叫が廊下に響き渡った。

「ディアス…もう良いでしょう。」

「はっ。」

レバントスは離されると、廊下に座り込んだ。

「貴方の目的は分かりました。」

ルーシエは紅茶をテーブルに置くと、黒装束をなびかせながら振り返った。

「貴方は私の力を欲しているのですね？」

ルーシエは紅茶をテーブルに置くと、黒装束をなびかせながら振り返った。

「貴方は私の力を欲しているのですね？」

歩み寄ってルーシエが問いかけると、レバントスは笑いながら顔を上げた。

「そうさ！お前の力を利用し、世界一の大盗賊レバントス様になるんだっ！」

「具体的に…貴方は私に何を求めているのですか？」

ルーシエが問いかけると、レバントスは腕組みをして考え始めた。

「そうだな…馬にも追いつかれねえスピードと、何十人の兵隊にも負けねえパワーかな…。」

「…そんなもので宜しいのですね？」

「ん？」

レバントスがルーシエを見ると、彼女は呪文を詠唱して…彼の身体を魔力で強化した。

「す、すげえ…身体が燃えるようだぜ…。」

「では。」

ルーシエが振り返り、応接間へ入っていくと…レバントスは不気味に微笑んでルーシエの背後に駆け寄った。

「あとは…お前を誘拐していくだけだあ！…！」

「!…ルーシエ様っ!」

レバントスがルーシエに手を伸ばした瞬間…。

「テレポート…。」

「なっ!?!」

ルーシエが呟くと…レバントスの足元に黄色い魔法陣が展開した。

「私は皆のものです…独占は出来ませんよ?」

ルーシエは笑顔でそう告げると…指をパチンと鳴らした。

「さようなら。」

「待ちやがれ!俺はお前の力を…」

強制的に瞬間移動させると、ディアスがルーシエに歩み寄った。

「まったく…身の程知らずな人間でございましたな。」

「彼は欲望に支配されています…一番支配されてはいけない感情に

…。」

「欲望は人の心を簡単に闇へと染める悪しき感情ですからな。」

「その通りです。彼があのか力を、正しき事に使ってくれば良いのですが…。」

「悪い事に使いそうだよ〜?」

ミンクがふらふら飛びながらやって来ると、ルーシエの肩に座った。

「ミンク? 今まで何処に…。」

「トイレッ! なんかも腹痛くてえ。」

「肩に座っていますがお、お尻はちゃんと拭きましたよね?」

「ふ、拭いたに決まってるじゃん! 失礼だなあっ!!」

不貞腐れるミンクを見て、ルーシエは苦笑いを浮かべた。

数日後…。

王都ライクナッドでは、レバントスが暴れ回っていた。

「ひゃーはははっ!」

レバントスが振り返ると…騎馬隊がみるみる遠ざかっていく。

「遅い遅い!…ん?」

全身鎧を纏った兵隊がレバントスに飛び掛かり、山となっていくも…彼は兵隊を吹き飛ばして仁王立ちしていた。

「ひゃーはははっ! 魔女の力を得たこのレバントスに、敵う奴なん

「ざいやしねえ！」

高笑いをしているレバントスは知らなかった。

自分の身体の異変に彼が気づいたのは、それから数日後の事だった。

「おかしい…。」

レバントスは体毛が身体全体を覆い始める頃になって、ようやく自分の身体の異変に気がついた。

「力を使う度…まるで理性が飛んでいくみてえな感じがしやがる。」

ライクナツド付近の森にあるレバントスの隠れ家の前に黄色い魔法陣が現れると…閃光が走った後、ルーシエが姿を現した。

「なんだ？…あ！てめえは！」

「やれやれ…やはり、悪しき事に力を使ったようですね？」

ルーシエが冷たい笑顔でそう告げると、レバントスは彼女に駆け寄って胸ぐらを掴んだ。

「てめえ！計りやがったなっ！？なんだ、この身体の変化はっ！さっさと元に戻しやがれ！」

レバントスがそう叫ぶと…ルーシエは微笑みながら、語り始めた。

「貴方は…何か勘違いをしているようですね。」

「何？」

「貴方は誰に力を欲しましたか？」

「魔女のてめえに決まって…！」

レバントスが何かを察した表情になると…ルーシエは静かに微笑んだ。

「そう…私は神様でも天使でもありません。【魔女】なんですよ…力を得る為のリスクが高いのは当然でしょう？」

レバントスはその時、魔女の伝説を思い出した。

『自分の【大切な物】を譲れば、魔女はどんな願いでも叶えてくれる。』

「ま…まさか！俺から奪った…大切な物っていうのは！」

怯えるレバントスに、ルーシエは微笑みながら指を差した。

「そう…貴方の人間の身体です…。」

顔が青ざめるレバントスに歩み寄るルーシエ。

「束の間でしたが、大盗賊気分は味わえましたか？」

「畜生…俺は…俺はこれからどうなっちまうんだっ!？」

「知能と理性を失ったモンスターへと化します…。貴方が盗んだ品々は、私から持ち主へと全て返還致しますのでご安心下さい?」

「ふざけ…!…な、なんだ?頭がボクッとしてきた…。」

知能が崩壊し始めたレバントス。

「あ!…最後にもう一つ。」

「?」

「貴方がクルスク・バレーで手を出した大勢のニンフ達ですが…あれは魔法で貴方を寝かし、夢を操作したものです。現実ではありませんので悪しからず?」

「て、てめ…え…。」

ふらふらし始めたレバントスを睨みつけるルーシエ。

「欲望に溺れた者の結末は、どれも酷いものですね?」

ルーシエは盗品の全てを持ち主へ瞬間移動させると、レバントスの前に歩いていった。

「では…山へと帰りましょう。」

ルーシエはレバントスの手を握ると…二人で隠れ家を去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3888z/>

霧のルーシェ

2011年12月13日05時04分発行